



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立った

今週は、転任する助任司祭に福江教会の日曜日 6 時と 9 時の司式を譲りました。前晩はローテーションなので、もう一人の助任司祭の当番と理解していましたが、直前に確認したら主任司祭になっていました。失職したかと思いましたが復職しました。明日は共同司式で何も話さないの、このミサで神のいつくしみについて考えることにしましょう。

さて、復活したイエスが弟子たちに現れる場面です。一度目は、トマスがいないときでした。二度目は、トマスもいるときでした。どちらも戸には鍵をかけていました。トマスと一緒にいたときはわざわざ「戸にはみな鍵がかけてあったのに」(20・26)と書かれています。そこへ復活したイエスが入ってきます。

復活したイエスは、「あなたがたに平和があるように」そして「聖霊を受けなさい」と仰いました。トマスと一緒にいたときに「聖霊を受けなさい」と繰り返されていません。トマスは聖霊の賜物を受けるチャンス逃したのでしょうか。

そうではありません。トマスもほかの弟子たちと一緒に、「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」(20・22-23)この賜物を受けたのです。本人の努力で受けたのではなく、神のいつくしみに触れて、罪を赦す聖霊の賜物を受けたのです。

トマスは真っ先に、神のいつくしみに触れたのだと考えています。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」(20・25)と心を頑なに閉ざしました。神のいつくしみは、誰よりも心を閉ざしている人に先に届けられ、ゆるしといやしの恵みにあずかることになったのです。神のいつくしみは、頑なに心を閉ざしている人に、真っ先に向けられるのです。

私たちにも、神のいつくしみの働きは同じです。トマスと一緒にいたとき、「戸にはみな鍵がかけてあった」のでした。鍵をかける場所は、家の戸だけではないでしょう。私たちは自分の心に鍵をかけて、誰も入れないようにすることがあるのではないのでしょうか。頑なに自分の中に閉じこもり、人との関わりを拒んでいるあなたに、神のいつくしみは先に届けられるのです。

しかしどうやって、誰にも心を開かない人に、鍵がかけてある心に入ることができるのでしょうか。それは聖霊の力です。「聖霊を受けなさい」との呼びかけに、すべてが委ねられているのです。聖霊を受けようと心を開く人にはもちろん、「戸にはみな鍵がかけてあった」そんな人にも、聖霊はおいでになり、神のいつくしみを届けてくださいます。

すべての人に、特に、心の扉に鍵をかけている人に神のいつくしみが届きますように、ミサの中でお祈りいたしましょう。主任司祭も、日曜日は共同司式の中でお祈りいたします。

復活節第3主日(ルカ 24:35-48)